

3月8日(水)

2017年(平成29年)

発行所：東京都千代田区一ツ橋1-1-1
〒100-8051 電話(03)3212-0321
毎日新聞東京本社

2017年(平成29年)3月8日(水) 13版 社会 30

東日本大震災 6年

岡山、官民あげ移住支援

安住を探して

原発事故からの自主避難

瀬戸内海を望む小高い丘 移った。

に幼いはしゃぎ声が響いた。「このタンポポも食べられるの?」。4人の子どもが小雨も気にせずしゃがみ込み、草花に目をこらす。夢中になって自然に触れる長女(10)を、菅野久美子さん(38)が目を細めて見守っていた。

岡山県玉野市で先月18日に開かれた東京電力福島第1原発事故からの避難者交流会。菅野さんと長女は福島県伊達市からの自主避難者だ。最初は東京で部屋を借りたが頼りにできる友人が近所になかった。「福島のような田舎に行こう」と2013年3月、岡山へ



避難者交流会で、野草を探しながら散歩する菅野久美子さん(左から2人目)＝岡山県玉野市で

就職先が決まらず戻るへ

きか悩んでいた昨年6月、避難者の友人に「一緒に店を開かない?」と誘われた。一軒家を借り、年明けに蒸しパン屋を開店。「避難者という意識は消えないけれど、薄れてきた。住み続ける覚悟が決まった」という。

復興庁によると、岡山県には先月13日現在、西日本で最も多い1016人が避難している。広島県(359人)や山口県(100人)などと比べ突出して多く、「岡山現象」とも呼ばれる。3割は福島からで、残りは関東などからとみられる。

「原発が近くになく、事故直後から10以上の支援組織が連携して活動したことで、避難者や移住者が増えた」と日本大学の後藤範章教授(都市社会学)は指摘する。岡山市が政令市で初めて「移住・定住支援室」を設置するなど、行政も受け入れに動いてきた。

自主避難者を支援する「子ども未来・愛ネットワーク」(岡山市)の大江愛代表(43)自身も、福島県川内村から出身地の岡山市に夫と子どもと移った。昨秋の岡山県議補選に立候補して

「子どもが伸び伸び育つ環境を作りたい」と訴え、元職を破り当選。避難者と行政をつなぐ県議が誕生した。岡山の避難者らは移住へとかじを切りながら、支え合って自立を目指している。福島から12年に息子2人と岡山市に自主避難した女性(51)は、次男がすでに小学校に行きたくないと言いつつ親の会」に参加。同じ悩みを持つ人が集まっていた、心が楽になった。不登校が続いていた次男は昨年10月、中学校見学から家に戻ると、女性に「行けそう」と告げた。収入はパートと夫からの仕送りの計約15万円しかないが、福島の住宅無償提供制度が終わる4月以降も、家賃を払って今の雇用促進住宅に住み続けようとした。採寸した次男の制服を受け取りに行く日近づいていく。【金森孝之写真】